

御衣布並 単衣布給候了。

抑 食は命をつぎ、衣は身をかくす。食を有情に施ものは長寿の報をまねき、人の食を奪ものは短命の報をうく。衣を人にもほどこさぬ者は世々所生に裸形の報をかんず。六道の中に人道已下は皆形裸にして生。天は随生衣なり。其中鹿等は無衣にして生のみならず、人の衣をぬすみしゆへに、身の皮を人にながれて盗衣をつぐのうほうをえたり。人の中にも鮮白比丘には生ぜし時、衣を被て生ぬ。仏法の中にも裸形にして法を行ずる道なし。故に釈尊は摩訶大母比丘尼の衣を得て正覚をなり給き。諸比丘には三衣をゆるされき。鈍根の比丘は衣食とのわざれば阿羅漢果を証せずとみへて候。殊に法花経には柔和忍辱衣と申て衣をこそ本とみへて候へ。又法花経の行者をば衣をもつて覆せ給と申もねんごろなるぎなり。日蓮は無戒の比丘、邪見の者なり。故天これをにくませ給て食衣ともしき身にて候。しかりといえども法花経を口に誦し、ときくこれをとく。譬へば大蛇の珠を呑、いらんよりせんだんを生ずるがごとし。いらんをすてゝせんだんまいらせ候。蛇形をかくして珠を授たてまつる。天台大師云、「他経は但男に記して女に記せず」等云云。法花経にあらざれば女人成仏は許れざるか。具足千万光相如来と申は摩訶大比丘尼のことなり。此等もつてをしはかり候に、女人の成仏は法花経により候べきか。要当説真実」は教主釈尊の金言、「皆是真実」は多宝仏の証明、「舌相至梵天」は諸仏の誓状なり。日月地に落べしや。須弥山はくづるべしや。大海の潮は増減せざるべしや。大地は翻覆すべしや。此御衣の功德は法花経にとかれて候。但心をもつてをもひやらせ給候へ。言にはのべがたし。